2012 年　9 月 23 日・しんぶん赤旗「読書」欄では

反戦・反原爆から見える希望

増岡敏和全詩集

この詩集は、2010 年 7 月 81 歳で逝った詩人増岡敏和の全詩業を収録、590 ページにおよぶ大冊である。既刊 14 詩集のほか未収録の詩も付されている。戦争を憎み、原爆反対を買いた生涯の詩のすべてを通読すると、暗たんたる経験の行くすえに生命の未来への希望が見えてくる。

広島で生まれ、育った詩人は、あの 8 月 6 日には海軍予科練生として高知にいて被爆をまぬがれるが、女学生の妹が被爆死、母はその娘を探して被ばくする。父は戦死。9 月 1 日に広島に帰り、長男として一家の生活困苦のなかで、生活記録詩を書き社会批判の姿勢を強めていく。

峠三吉を中心とする詩サークルのなかで詩作に励み、反戦平和の詩人として出発した増岡敏和は、上京して民医連の職場で経営面の精力的な活動家となる。しかし、そのなかでも詩の効用を重視し、反核や被爆者救援の運動の重要なメッセージの方法を手放すことはなかった。

彼の詩作のモチーフは日常の生活が反映されているが、原点になるのは広島で被爆した人びとの体験である。その証言を記録し、追体験することで多くの詩を書いている。その作業はまさに自らの「体験化」を実践するものであったことが何冊もの詩集から読みとれる。

なお 1992 年には「虹」他 2 篇の詩で、日本共産党創立 70 周年記念文芸作品に入選した作品も収録されている。

60 年安保の政治的高揚や官憲の弾圧への抗議の詩、子どもの誕生や孫たちへの思いも描かれ、美しい叙情詩も数多いのであるが、やはり一貫した主題は変わることがなかったと言えよう。（評者：南浜伊作　詩人）

と紹介されています。